

忘れない。長年夢に見た日本だ。だれもの顔が涙でくしゃくしゃになっていた。よかったな、よかったなと手をとりあって喜んだ。

船は舞鶴港に入港、そして帰国した次第である。

あとがき

私は九死に一生を得て帰還したが、多くの犠牲になられた戦友を思うとき、生存者の我々は胸が痛み、悲しみに耐えません。シベリアで亡くなられた英霊に対して、心の底から御冥福をお祈りします。

つらかった捕虜生活

——異国の丘の体験記——

栃木県 八木澤 旺 二

私は、昭和二十年七月二日、北支派遣軍独歩52から、伍長の階級章をつけて、石頭予備士官学校の第十三期生として入校した。そして八月に軍曹に昇級した。毎日対戦車、肉迫攻撃、挺身切り込み隊の訓練が重点であっ

た。

八月九日未明、ソ連軍が国境を越え満州に侵入との報に、石頭予備士官学校三千六百人の幹部候補生は二軍に分かれ、小松茂久万大佐の率いる一隊は東京城へ、荒木護夫少佐の率いる一隊は掖河、愛河方面へと出動した。

八月十二日、私は荒木連隊の連隊砲手として掖河に着、敵戦車の進撃を防止し、攔坐させるために、砲陣地を掖河の高台に構築完了させた。

我が勇猛果敢な候補生の戦闘むなく、近代적裝備を持ったソ連軍には勝てずに、多数の犠牲者を出しながら、横道河子まで後退し、八月二十一日（火）午前中、十五日の終戦命令も知らされずに武装解除になった。

大きな倉庫に、私たち三十人位の連隊砲隊員は強制的にソ連兵の警備付で引率されて行った。これが仮収容所となったのである。次から次へと無裝備になり、屠殺場に運ばれる牛馬のように、魂を失った日本兵が下うつむき加減でぞろぞろと仮収容所の中に入ってきた。二、三日で千人近い将兵が収容されたという。

私は戦闘中の服装そのままであり、軍服も破れ、軍靴

も破れ、足が靴に入っているだけのものであった。食糧はコーリヤンが主で、空腹続きの毎日であった。それで我々は自衛策のため、ソ連兵の看視の目を盗み、脱走を防止する鉄条網を潜り抜け、満人の丹精してつくった畑の芋、カボチャ、トウモロコシ等、あたりかまわず掠奪してきては、飢えをしのぐに役立てたものである。

そのため野菜泥棒中に満人に鎌で切り殺された仲間も数多くいた。私もその糧秣受領に三度出かけ、大きなカボチャを持ち帰り、戦友たちに喜ばれた経験を持っている。

こんな動物以下の毎日の生活を続けながら、「必ず日本に帰れるのだ」というソ連兵の言葉にだまされながらも、私たちは祖国日本に帰れるまではと、懸命に生き長らえたのである。

十月二十三日、ダモイ、ダモイ、その出発命令に我々は欣喜雀躍、だれもが祖国の父母、妻子はじめ家族の姿を思い浮かべ、今までにない元氣な笑顔で有蓋貨車の中での一夜の眠りについたのである。翌朝早々ゴトン、ゴトンと鉄橋を有蓋列車は渡ってしまった。我々は「いよ

いよソ連領だ」と覚悟を新たにしたのであった。列車は夜間のみ走り続け、三日後に小さな駅に全員下車させられ、草むらの細い一本道を、飢えと寒さに衰弱した日本兵の一行になった縦隊が、何百メートルも延々と続いていた。

一時間も歩いただろうか、道路の下の沢地に古びたベグスが見えだした。二十分後にはそのベグスに入り、松本隊長から「このベグス一〇六収容所が、松本作業大隊のこれから作業活動する拠点である。みな協力して身体を守り働くように」との訓辞があった。

次にこれからどんな作業労働をしたのか、月日の流れに沿いながら記録していくことにしたい。

収容所内の生活

収容所は丸太を組んでつくった掘立小屋である。我々はベグスと呼んでいた。もちろん電灯があるわけではない。ランプもローソクもない、夜の灯とした白樺の油煙が部屋いっぱいたち込め、人間の顔や手も真っ黒になってしまった。笑うと目玉だけがギラギラ輝き、歯は真っ白に見える。洗顔する水もないので、入浴もできないの

で、全く原始時代以上の野蛮な生活に戻ってしまったのである。

食べ物是一日黒パン三百グラムに、塩漬けの魚を煮出したスープが飯盒半分くらいであった。それで我々は春には野菜をとり、秋にはキノコをとって胃袋いっぱい食べた。今でも私は毎年実施される精密検査に、胃拡張と診断されている。夜は南京虫、シラミが多くて眠れぬ夜が続いたこともある。正月やお祭りのときのご馳走の話をよくし、空腹の足しにしたものであるが、翌朝起床になってもご馳走の夢がさめずに、起床しなかった戦友も続出した。これが収容所内の生活状況であった。

伐採活動

一〇六収容所の周りは、エゾマツ、トドマツ、カラマツ等の大木がうつうつ蒼々と空高く繁茂している密林地帯である。私はその材木の伐採に従事した。二人で大鋸を引いたり押したり左右運動をしながら、大木を切り倒す。大木が倒れる瞬間が極めて危険である。木の倒れる余波で死傷者が何十人出たか数知れなかった。ソ連通訳の話では、ソ連本国の住宅に使う材料だと言っていた。

シベリア鉄道の復帰

独ソ戦に備え、シベリア鉄道は西部戦線に運ばれていたために、戦争が終り、この独ソ戦に役立った鉄道レールを再びシベリアに輸送し、我々日本人とドイツ人の捕虜にシベリア鉄道の復帰作業の重労働をさせたものである。日本人、ドイツ人はノルマに追われながらも、ソ連人労働者以上に働き続けたものであった。

草刈り作業

寒いシベリアであるが、大陸性気候のため、夏は猛暑が続き、草木が一瞬にして伸び始め、成長が速い。森林地帯の北に行くと、草原地帯がある。この草原を私たち草刈り部隊が大きな鎌を水平に振り回しながら草を刈り倒して進む。一人のノルマは一アールであった。秋になり乾燥すると、馬そり高く積み上げ、鉄道沿線まで運搬したものである。

以上をもって私の労苦記録といたします。